

# 京都の後期古墳

1. 未盗掘の石室の調査－久田山古墳群 B 支群の調査から－  
三好博喜 P 1 ～ P 9
2. 古墳時代後期の一大墓地の調査－女谷・荒坂横穴群の調査から－  
引原茂治 P10 ～ P16
3. 京都の後期群集墳  
筒井崇史 P16 ～ P23

期日：平成 22 年 7 月 3 日 (土)

場所：八幡市立生涯学習センター ふれあいホール

主催 京都府教育委員会

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

後援 八幡市教育委員会

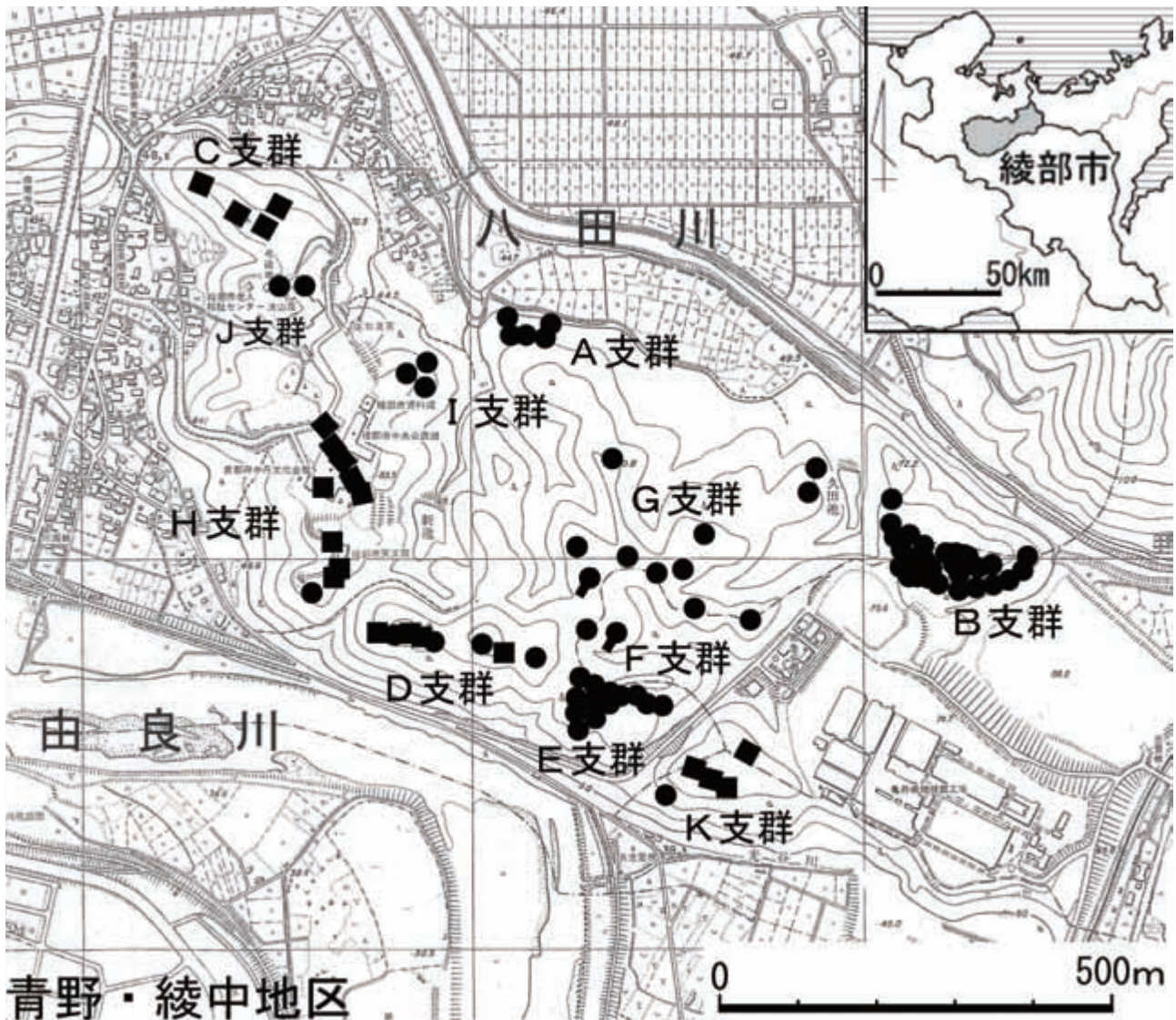
# 未盗掘の石室の調査

きゅうたやま  
—久田山古墳群 B 支群の調査から—

綾部市教育委員会  
総主任 三好博喜

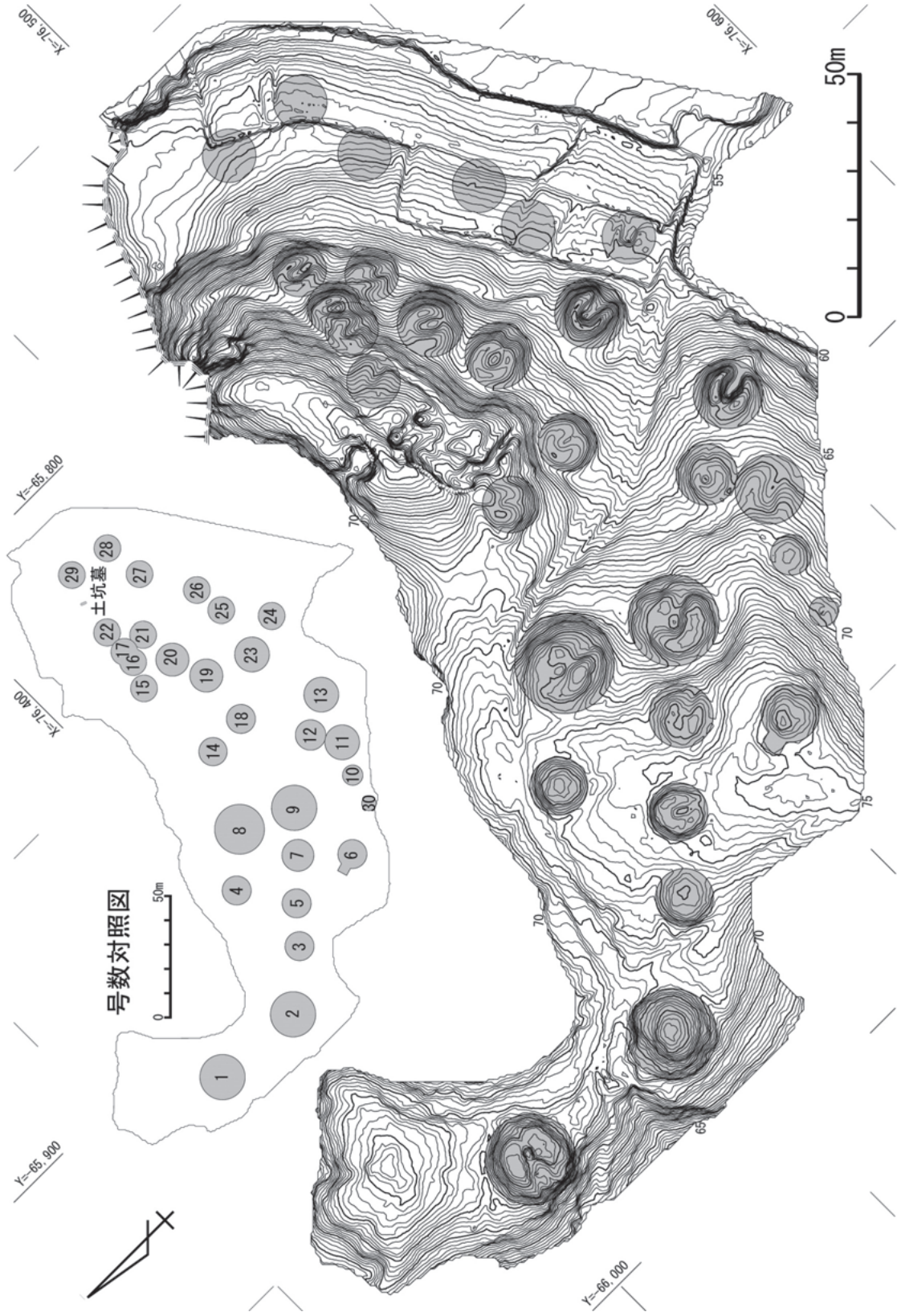
## 1. はじめに

綾部市は京都府北部を流れる由良川の中流域に位置し、古くから開けていたため市内には 1000 基を越す古墳が築かれている。今回報告する久田山古墳群は市の中心部に程近い



第 1 図 久田山古墳群構成図





第2图 久田山古墳群B支群地形測量図

久田山古墳群 B 支群一覧表

B1号墳	・横穴式石室墳・一部石材抜き取り、床面礫敷き・円墳・直径 20m・高 2.5m・石室全長 8.5m、玄室規模 2.1m×4.2m 【出土遺物】鉄製品(鏃・刀子・鎌)・銅釧・耳環・玉類・土器など。総数 208 点以上。
B2号墳	・横穴式石室墳・完存・未盗掘、床面礫敷き・円墳・直径 20m・高 4.0m・石室全長 9.8m、玄室規模 2.3m×4.5m天井高約3m 【出土遺物】人骨・鏡・馬具・鉄製品(刀・鏃・釘・斧・刀子)・玉類・貝殻・土器など。総数 248 点以上。
B3号墳	・木棺直葬墳・円墳・直径 13m・高 2.0m・墓壇長約 4.5m×幅約 1.8m 【出土遺物】鉄製品(鏃)・玉類・紡錘車・土器など。総数 37 点以上。
B4号墳	・木棺直葬墳・円墳・直径 12m・高 1.8m・墓壇長約 3.8m×幅約 1.5m 【出土遺物】鉄製品(剣・鏃)・玉類・貝殻・土器など。総数 35 点以上。
B5号墳	・横穴式石室墳・大半石材抜き取り、床面礫敷き・円墳・直径 13m・高 1.6m 【出土遺物】鉄製品(鏃・刀子)・土器など。総数 14 点以上。
B6号墳	・横穴式石室墳・一部石材抜き取り・円墳(造り出し付)・直径 13m・高 1.5m 【出土遺物】鉄製品(鏃・釘・斧)・耳環・玉類・土器など。総数 105 点以上。【備考】墳丘列石
B7号墳	・横穴式石室墳・一部石材抜き取り、墳丘列石・円墳・直径 13m・高 1.2m 【出土遺物】鉄製品(刀・鏃)・馬具・耳環・玉類・土器など。総数 145 点以上。【備考】墳丘列石
B8号墳	・横穴式石室墳・一部石材抜き取り、床面礫敷き、墳丘列石・円墳・直径 23m・高 4.0m 【出土遺物】人骨・鉄製品(鏃・刀子)・耳環・玉類・土器など。総数 289 点以上。【備考】墳丘列石
B9号墳	・横穴式石室墳・一部石材抜き取り、墳丘列石・円墳・直径 20m・高 2.5m 【出土遺物】鉄製品(鏃・釘)・馬具・耳環・玉類・土器など。総数 272 点以上。【備考】墳丘列石
B10号墳	・木棺直葬墳・円墳・直径 8m・高 1.0m・墓壇長約 3.3m×幅約 1.5m 【出土遺物】土器など。総数 4 点以上。
B11号墳	・横穴式石室墳・総ての石材抜き取り・円墳・直径 13m・高 1.3m 【出土遺物】土器など。総数 9 点以上。
B12号墳	・横穴式石室墳・一部石材抜き取り、墳丘列石・円墳・直径 13m・高 2.0m 【出土遺物】鉄製品(鏃・刀子)・耳環・玉類・土器など。総数 143 点以上。【備考】墳丘列石
B13号墳	・横穴式石室墳・大部分の石材抜き取り、床面礫敷き、墳丘列石・円墳・直径 14m・高 2.5m 【出土遺物】人骨・鉄製品(鏃・刀子・刀・柄頭)・耳環・玉類・土器など。総数 291 点以上。【備考】墳丘列石
B14号墳	・横穴式石室墳・一部石材抜き取り、墳丘列石・円墳・直径 12m・高 2.5m 【出土遺物】鉄製品(鏃・刀子)・耳環・玉類・土器など。総数 181 点以上。【備考】墳丘列石
B15号墳	石室残存長 7.73m、羨道部石材ほとんど残存せず 【出土遺物】土器
B16号墳	石室残存長 5.77m、玄室規模 1.05m×2.46m、側石のみ石材残存 【出土遺物】玉類、土器 【備考】墳丘列石
B17号墳	石室残存長 3.12m、玄室規模不明、羨道部のみ石材残存 【出土遺物】鉄刀、鉄鏃、土器 【備考】墳丘列石
B18号墳	石室全長 6.54m、玄室規模 1.14m×3.46m、側壁のみ石材残存 【出土遺物】馬具、鉄刀、飾り金具、耳環、銅椀、土器 【備考】墳丘列石
B19号墳	石室全長 8.82m、玄室規模 1.43m×4.16m、天井部の一部石材残存 【出土遺物】馬具、鉄刀、飾り金具、耳環、玉類、土器 【備考】墳丘列石
B20号墳	石室全長 8.35m、玄室規模 1.73m×3.60m、側壁玄室規模 1.73m×3.60m、側壁のみ石材残存 【出土遺物】馬具、鉄刀、飾り金具、耳環、玉類、土器 【備考】墳丘列石
B21号墳	石室残存長 4.48m、玄室規模 1.11m×2.58m、羨道部一部残存 【出土遺物】鉄刀、耳環、土器 【備考】墳丘列石
B22号墳	石室推定長 7.55m、玄室・羨道とも一部側壁のみ残存 【出土遺物】鉄刀、飾り金具、耳環、紡錘車、土器 【備考】墳丘列石
B23号墳	石室規模不明、石材ほとんど残存せず、墳丘のみ残存 【出土遺物】少量の土器片のみ 【備考】墳丘列石
B24号墳	・横穴式石室墳・大部分の石材抜き取り・削平により墳形不明 【出土遺物】鉄鏃・土器など。総数 13 点以上。
B25号墳	石室残存長 3.46m、【出土遺物】鉄器、玉類、土器 【備考】墳丘削平
B26号墳	石室残存長 5.32m、【出土遺物】耳環、玉類、土器 【備考】墳丘削平
B27号墳	石室残存長 1.98m、【出土遺物】土器 【備考】墳丘削平
B28号墳	石室規模不明、一部石材散乱するのみ 【出土遺物】耳環、玉類、土器 【備考】墳丘削平
B29号墳	石室残存長 4.63m、玄室規模 12.7m×2.61m、側石のみ石材残存 【出土遺物】鉄刀、鉄器、玉類、土器 【備考】墳丘削平
B30号墳	・横穴式石室墳・一部石材抜き取り・削平により墳形不明【出土遺物】土器など。総数 4 点以上。



綾部市里町を中心に下八田町から味方町にかけてひろがる古墳群である。群は100基程度の弥生墳墓やよいふんぼと古墳とで構成されており、綾部市を代表する古墳群のひとつとして挙げられる。

久田山古墳群の立地する丘陵は「久田山（きゅうたやま）丘陵」と呼ばれる。この丘陵は、由良川と支流の八田川とに挟まれた形で西側に向けて張り出し、丘陵からは由良川筋を極めて良好に見渡すことができる。標高90m程度のなだらかなこの丘陵には小さな谷筋が入り込んでおり、古墳群はそれぞれ尾根筋に制約されながら、小さな支群しぐんを形成している。現在ではA支群からK支群までに分けられ、それぞれ築造時期や立地に若干の違いがある。

A支群は、丘陵の北端に位置する。円墳5基から成る支群である。墳丘は一様に高く、横穴式石室墳よこあなしきせきしつふんである可能性が高い。B支群は丘陵の北東部に位置し、30基から成る支群である。今回全域を発掘調査したことにより、木棺直葬墳もつかんじきそうふん3基と横穴式石室墳27基、土坑墓どこうぼ1基を確認した。墳丘を残すものの大半が円墳であり、1基だけが造出しつくりだをもつ。6世紀に築造され、7世紀半ばころまで利用されていた。C支群は、丘陵の西北端に位置する。11基が登録されているが、明確な墳丘を有する4基はいずれも方墳で、埋葬主体部まいそうしゆたいは直葬系じきそうけいと思われる。D支群は丘陵の南側に位置し、眼下に由良川を望む。円墳・方墳など8基から成り、短い造出しをもつ円墳を含む。E支群は丘陵の南東側に位置し、直葬系の円墳13基から成る。F支群は、丘陵の中央部に位置する。2基の前方後円墳ぜんぽうこうえんふんと2基の円墳とからなる。久田山古墳群のなかでも卓越した存在である。G支群は丘陵の東側に位置し、9基の円墳が散在する。H支群は、丘陵の西南側に位置する。10基のうちの8基を昭和53（1978）年と平成4（1992）年とに綾部市教育委員会が発掘調査し、弥生時代後期の墳墓群であることを確認した。I支群は、H支群から北にのびる尾根の先端部に位置し、3基の円墳から成る。J支群はH支群とC支群との間に位置し、2基の円墳から成る。昭和53（1978）年に発掘調査が行われたが、主体部は確認されていない。K支群は丘陵の南西端に位置する。丘陵腹部きゅうりょうふくぶに円墳1基、頂部に方形墳4基がある。平成14（2002）年に発掘調査を行い、円墳は古墳時代中期末、方形墳は弥生時代末期から古墳時代前期にかけてのものであることが判明した。

概観したとおり、久田山古墳群は弥生時代末期から古墳時代終末期に至る大規模な墓域ぼいきである。こうした墓域を形成した集落は、由良川の対岸にあたる青野・綾中地域あおの あやなかにあったものと考えている。

B支群の範囲は、現在綾部市土地開発公社の所有となっており、造成を含めた有効活用が求められている。



写真1 調査地遠景（東から）



写真2 木棺直葬墳の一例（B 4号墳）

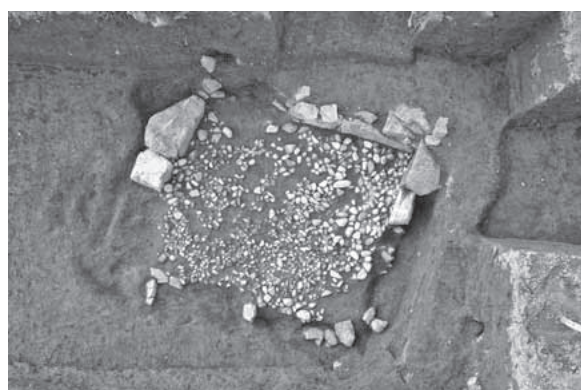


写真3 玄室正方形プラン（B 5号墳）



写真4 外護列石の一例（B12号墳）

## 2. 久田山古墳群 B 支群の調査

久田山古墳群 B 支群については、これまで分布調査の記録から説明がなされてきた。それぞれの調査の度に 7 基（1975 年）、18 基（1983 年）、22 基（1998 年）、とその数を増やしており、それぞれの位置関係や詳細な地形を把握する必要があった。このため国庫補助金を受けて平成 14 年度から 5 か年に渡る範囲確認調査を行った。測量調査では対象面積が 2 ha 余りと広範囲であったことや、樹木や竹林が生い茂る山中であったことから、従来の平板測量は困難と判断し、トータルステーションで 3 次元座標を記録、GIS ソフト M apinfo を使用し、等高線を発生させる手法を採った。測量調査は、調査担当者・調査補助員の 2 名あたり、延べ 89 日で 46,000 点近いデータを採取した。また、緩斜面が広がる丘陵裾部は、かつては茶畑であったが、現状は孟宗竹が密生する荒れた竹藪と化していた。このなかにも基底石のみを残す石室墳が目視できたため、埋没した石室墳の有無を確認する必要があった。このため、電気探査・磁気探査の物理探査を実施した。探査の結果、埋没した石室墳の存在する可能性が高い箇所が数か所認められ、その後の試掘調査の結果、埋没した横穴式石室墳 5 基と土壙墓 1 基を新たに確認している。

平成 19 年度・20 年度は、全面的な発掘調査を行うこととなり、平成 19 年 5 月 21 日から平成 21 年 3 月 31 日にかけて実施した。調査の結果得られた B 支群の主な知見は以下の通りである。

ふんきゆう

墳丘規模はほぼ 3 段階に分かれる。4 基（B 1・B 2・B 8・B 9 号墳）が直径 20 m を越し、

B 8号墳が23 mで群中では最大となる。次いで13 m前後が14基、10 m以下が6基となる。墳丘を残すものの大半が円墳であり、B 6号墳だけが造出しをもつ。

丘陵最高位は標高約74 mでB 6号墳が位置し、丘陵裾は標高約55 mである。

木棺直葬墳は3基（B 3・B 4・B 10号墳）で、27基が横穴式石室である。木棺直葬墳は横穴式石室墳と並行して築造された可能性が高い。

石室構造では、明確に玄室げんしつを設けるものは8基程度である。玄室平面形はB 5号墳が正方形に近いプランをもつほかは長方形プランである。石室規模ではB 8号墳が最も大きい（石室全長約11.2 m、玄室長約5.1 m、玄室幅約2.2 m）。

石室墳には墳丘裾ふんきゆうすそや頂部ちようぶを取り巻く外護列石がいごれつせきや墳丘内列石ふんきゆうないれつせきをもつものが多数ある（B 6・B 7・B 8・B 9・B 12・B 13・B 14・B 18・B 19・B 23号墳など）。

石室に使用された石材のほとんどがチャートである。丘陵北東部にはチャートが露出する岩盤があり、石材を切り出したとも考えられる。

B支群の形成は6世紀前半に始まり、一部の石室墳では7世紀半ば過ぎまで追葬ついろうが行われる。築造は北西側の丘陵頂部附近から始まり、南東側の丘陵裾部へ向けて展開したと考えられる。

木棺直葬墳を除き、大半の石室墳は攪乱かくらんを受けていたが、B 2号墳だけは人的攪乱を受けた形跡が見受けられなかった。調査中の羨道部せんどうぶの埋没状況からみても後世の人の出入りは不可能であり、未盗掘と判断した。

### 3. 久田山B 2号墳の調査

B支群の横穴式石室墳のなかで唯一後世の人的攪乱を受けていなかった石室墳である。古墳群のなかでも北端に位置する。直径約20 mを測る円墳で、B支群中では最大級の規模をもつ。開口部側かいこうぶでの高さは約4.0 mあり、丘陵側でも高さ約2.5 mある。墳丘北側には封土ふうどがややずり落ちた形跡が認められた。石室内でも当該箇所このところで石材が脱落しており、自然崩落もしくは石室自体の歪みから起きた事象と思われる。石室進入口は谷側に向いた西側にある。測量図には筋状に窪んだ若干の地形変化に現れるだけで、完全に閉ざされていた。羨道部の調査を進める中で石材の多くが崩落し、天井石てんじょうせきも大きく傾いていることがわかった。側壁の石材が天井石の重量に比べ貧弱で、圧迫され破砕した可能性が高い。こうした状況のなかで羨道部へいぞくせきは閉塞石と合わせて完全密封されたものと思われる。密封された時期は特定できないが、少なくとも玄室内は埋葬直後の状態を留めていると感じられた。

石室は全長約9.8 m、玄室規模は長さ約4.5 m・幅約2.3 m、天井高約3 mである。室





写真5 B5号墳玄室奥から



写真6 B2号墳出土高杯形器台

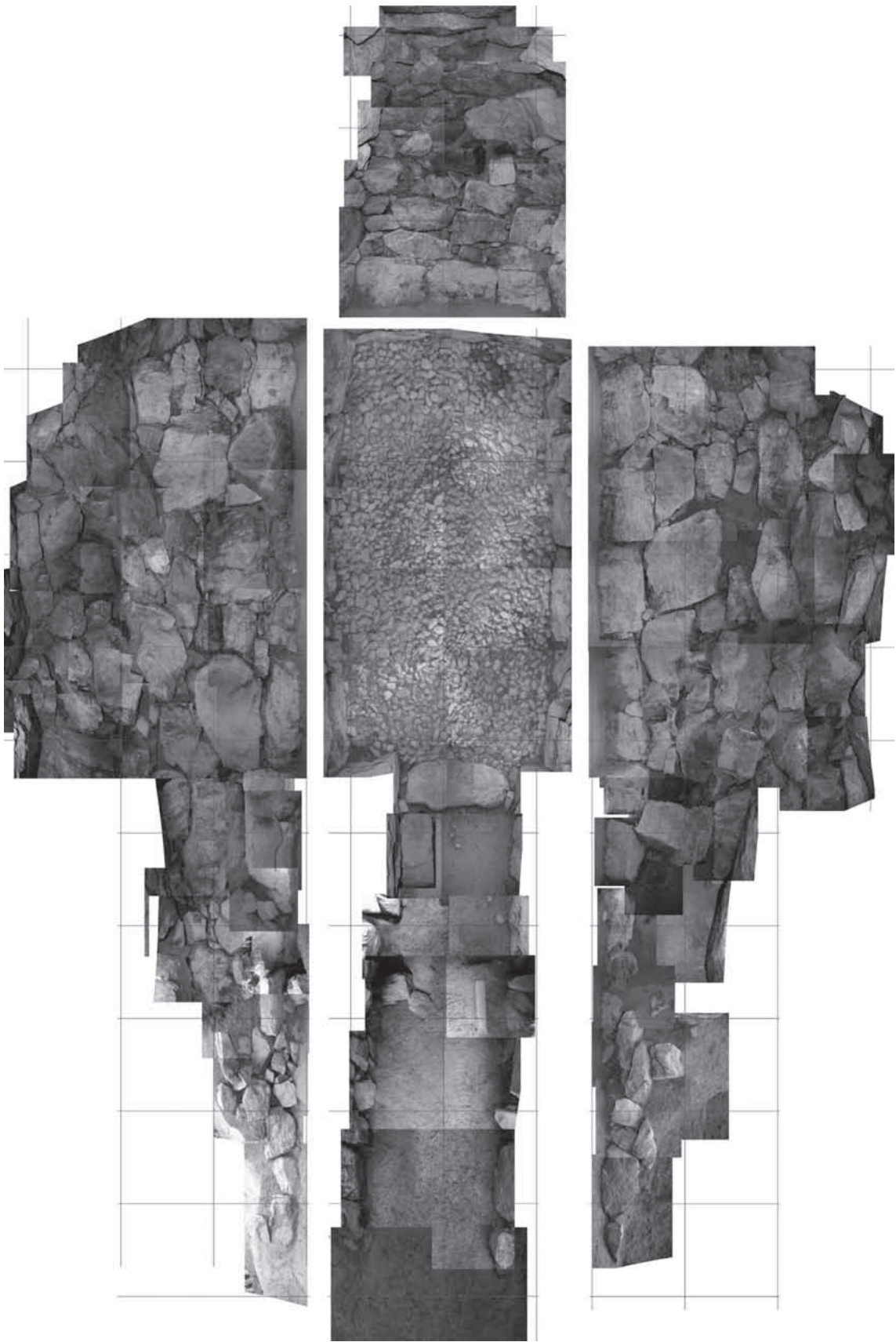
平面形は両袖形態を採るが、左袖（奥壁を背にして以下同じ）の出はやや弱い。玄門部に敷居石を1石置き、玄室床面には拳大の川原石を約30cmの厚さで敷き詰めている。側壁は5段から7段に割り石を積み上げている。床面から1.5m附近まではほぼ垂直に立ち上がり、そこから大きく内傾させ、持ち送っている。石材はチャートである。玄室天井石は4枚、羨道部天井石は3枚を架ける。玄室床面は側壁石材が数石崩落していたが、土砂の流入は少なく覆土は20cm程度であった。

出土遺物には人骨・鏡・馬具（轡・辻金具・帯金具）・鉄製品・玉類・貝殻・土器などがある。人骨片には頭蓋骨の一部や四肢骨などがあり、石室左側の奥壁寄りから出土した。同じ位置からの青銅製の小型鏡が出土している。馬具は石室右側の奥壁寄りから出土した。轡・辻金具・帯金具などがあり、鏡板や辻金具には金箔が施されている。付近から放射肋をもつイタヤガイ科二枚貝の左殻の一部が出土した。用途はわからない。鉄製品では直刀が玄室中央付近、人骨右側から出土した。斧は奥壁寄りから出土している。玉類は玄室右側前寄りを中心に管玉・切子玉・白玉・ガラス小玉などが出土した。他の石室で数多くみられた耳環は出ていない。土器類は杯・高杯がほとんどを占める。杯は蓋・身合わせて50点余りある。型式は陶邑編年TK10古段階から新段階前後に並行する時期に限定される可能性が高い。高杯は須恵器・土師器合わせて20点ほどある。土器類の出土は玄室両袖部の隅からが多く、特に高杯はほとんどが右袖部隅から出土した。一方甕や壺・瓶などは極めて少なく、石室内外出土分をあわせても土師器の甕・壺・長頸壺、須恵器の大甕や提瓶2点などがあるだけである。

特異な出土遺物に須恵器の高杯形器台がある（写真6）。器高約53cm、口縁部径約33cm、裾部径約26cmを測る。脚部には三角形の透かし孔を4段設け、上部2段は3方向、

脚部には三角形の透かし孔を4段設け、上部2段は3方向、





第3図 久田山B2号墳石室展開写真

下部2段は4方向に開けている。破碎されたためか小片で出土しているが、その散らばり方には特徴がある。杯部は玄室内から出土し、脚部は前庭部から出土した。何らかの意図をもって破碎<sup>はさいとうき</sup>投棄された可能性がある。

B2号墳では人的攪乱が及んでいなかったことから、埋葬当時の状態を調査できたと認識している。

#### 4. おわりに

久田山古墳群B支群については今後整理作業の進展とともに多くのことが明らかとなるう。

久田山古墳群を造営した集落は青野・綾中地区にあると推測している。この地域には弥生時代から続く大規模な集落が立地する。律令期には何鹿（いかるが）<sup>ぐんが あやなかはいじ</sup>郡衙や綾中廃寺といった施設が置かれ発展をみせ、現代に至っては綾部市街地を形成する。この意味において、久田山古墳群は、「綾部の原点」・「綾部の心」とも言うべき遺跡なのである。

#### 久田山古墳群関係文献

- 京都府教育委員会「綾部市以久田野丘陵遺跡分布調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』1975）1975
- 綾部市教育委員会『久田山—京都府綾部市久田山遺跡・久田山南遺跡発掘調査報告書—』（『綾部市文化財調査報告』第5集）1979
- 山城考古学研究会『丹波の古墳（特）—由良川流域の古墳—』1983
- 中村孝行「綾部市久田山南遺跡の出土遺物について」（『太邇波考古』第5号 両丹技師の会）1985
- 綾部市教育委員会『綾部市遺跡地図』1998
- 綾部市教育委員会「久田山H2号墳」（『綾部市文化財調査報告』第19集）1993
- 綾部市教育委員会「久田山古墳群B支群確認調査概報」（『綾部市文化財調査報告』第33集）2003
- 綾部市教育委員会「久田山古墳群K支群発掘調査概報」（『綾部市文化財調査報告』第33集）2003
- 綾部市教育委員会『平成15年度久田山古墳群B支群確認調査概報』（綾部市文化財調査報告第34集）2004
- 岩井顕彦「京都府綾部市里町久田山古墳群H支群出土鉄器の再検討」（『太邇波考古』第22号 両丹考古学研究会）2005
- 綾部市教育委員会『平成16年度久田山古墳群B支群確認調査概報』（綾部市文化財調査報告第35集）2005
- 綾部市教育委員会『平成17年度久田山古墳群B支群確認調査概報』（綾部市文化財調査報告第36集）2006
- 綾部市教育委員会『平成18年度久田山古墳群B支群確認調査概報』（綾部市文化財調査報告第39集）2007
- 三好博喜「未盗掘の横穴式石室墳—京都府綾部市久田山古墳群B支群の調査—」（『京都府埋蔵文化財情報』第110号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）2009
- 綾部市教育委員会『久田山古墳群B支群発掘調査報告—遺構図版編—』（綾部市文化財調査報告第40集）2010



## 古墳時代後期の一大墓地の調査 —女谷・荒坂横穴群の調査から—

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

主任調査員 引原茂治

### 1. はじめに

調査地は、八幡市美濃山荒坂 65 - 2 に所在し、八幡市の南側、京田辺市との市界に近い丘陵地に位置します。付近には、多くの横穴があり、女谷・荒坂横穴群と呼ばれています。横穴は、丘陵斜面に横穴を掘り込んで造られた墓で、今回の調査地の東側では、第二京阪道路の建設に伴う調査で、52 基の横穴が見つっています。これらの横穴は、古墳時代後期から飛鳥時代の頃に作られました。数基の横穴からは人骨が出土しています。また、鉄地金銅張の胡籙金具も出土しています。これまで、女谷では A ~ C の 3 か所の支群が確認されており、今回見つかった横穴群は女谷 D 支群となります。

### 2. 調査概要

女谷 D 支群は、ほぼ北東から南西方向にのびる谷の北西側斜面に作られており、ほぼ南東方向に開口しています。幅約 40 m の場所に、8 基の横穴が密集して作られています。

今回検出した横穴のなかで最大のものは横穴 1 で、全長 17 m、玄室幅 2 m です。最小のものは横穴 6 で、全長 10 m、玄室幅 1.5 m です。横穴の平面形は羽子板状です。

横穴 1・横穴 2・横穴 6 では、玄門部付近で主軸に直交する土手状の堆積を確認しました。横穴を閉塞した痕跡とも考えましたが、下部から須恵器が多数出土し、高杯の割れ方などから、天井からの崩落土であることが判明しました。

横穴 3 では玄室奥、中央、玄門付近から耳環が 2 個ずつ出土しており、少なくとも 3 体の遺体の埋葬が行われたものと考えられます。小規模な横穴 6 と横穴 7 では、副葬品も少なく、追葬は行われなかった可能性も考えられます。

それぞれの横穴には、須恵器、土師器などの土器類のほか、耳環（金環・銀環）や鉄製品（鏃）などが副葬されています。出土した土器などから、この横穴群は、6 世紀末から 7 世紀前半頃（古墳時代末～飛鳥時代）にかけて築造されたものと考えられます。

横穴 4 と横穴 8 では、ある程度内部が埋まった段階で、墓として再利用された状況を確認しました。須恵器や土師器が出土し、それらの土器から 9 世紀頃に再利用されたものと

みられます。特に、横穴4では、土器のほかに、瑞雲双鸞八花鏡ずいいうんそうらんはつかきょうという銅鏡が副葬されていました。この瑞雲双鸞八花鏡は、唐鏡とうきょうを原型として日本で作られた踏み返し鏡ふみかえきょうとみられます。鏡背きょうはいを上にした状態で出土しており、下になっていた鏡面には紙の痕跡が残っており、紙に包んで副葬されたものと考えられます。同様の鏡が、奈良県五條市りょうあんじ霊安寺跡から出土しています。今回出土した鏡と比較すると、大きさや文様の状態が非常に類似しており、あるいは同じ鏡を原型として作られた可能性もあります。今回出土した鏡は、湯廻りが悪かったのか、周縁部の花形や雲型の文様が半周分鑄出されていませんが、当時の貴重品と考えられます。

なお、ほとんどの横穴が、谷底付近から墓道ぼどうを掘削しており、谷底を通路として使用していたものと考えられます。谷底部は、雨水などの水流によるものか、浅く窪んでいます。

埋土から奈良時代と思われる布目瓦片ぬのめがわらが出土しており、あるいは再利用された時期の通路であった可能性も考えられます。

### 3. まとめ

今回検出した横穴には、大きさ、副葬品の内容や多少などに違いがあり、被葬者の地位などが反映している可能性も考えられます。また、限られた場所に密集して横穴が作られている様子から、家族や一族のような集団によって営まれた墓とも考えられます。また、横穴が配置されている間隔から、横穴1・2・5・6・7の5基と横穴3・4・8の3基のグループに分かれる可能性も考えられます。これらの横穴のうちでは、横穴4が最も早く造られたものとみられます。時期的には、6世紀末頃とみられ、やや遅れて、その他の横穴が造られたようです。時期を知る標識となる蓋杯ふたつきが出土しない横穴もあるため、詳しい築造順は今後の検討課題ですが、規模の大きいものが先行し、小さいものが新しくなるものとみられます。今回の調査では人骨が残る横穴はありません。

女谷・荒坂横穴群では、これまで荒坂A～C支群、女谷A～C支群の調査を行っています。

最も早く築造が開始されたのは荒坂B支群で、6世紀後半頃と考えられます。6世紀末頃には、その他の支群でも横穴の築造がはじまり、7世紀中頃まで築造が続きます。今回調査したD支群は6世紀末頃に築造が始り、7世紀前半段階まで続くものとみられます。この横穴群の築造の最盛期に営まれた支群と考えられます。また、この支群は、限られた範囲内に密集して築かれており、ある1集落の墓と考えることもできます。他の支群とはやや離れた場所に営まれており、それらとの関係については、今後の検討課題です。

南山城地域では、今回調査した女谷・荒坂横穴群のほかに、多数の横穴群が営まれています。特に、木津川流域に分布しています。八幡市の南に隣接する京田辺市には、「大住」おおすみ



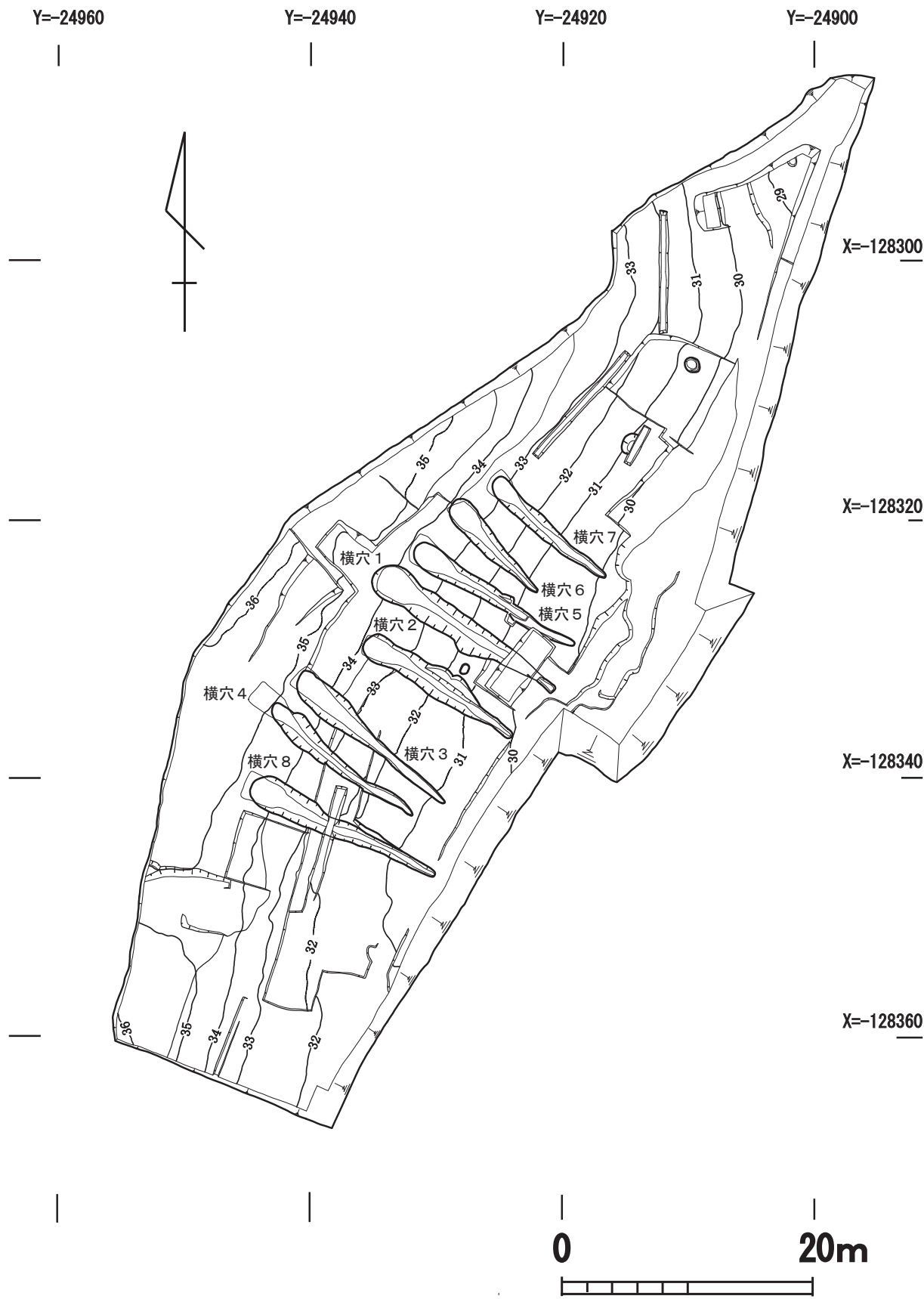
という地名が残り、律令期以前から大住（大隅）<sup>おおすみ</sup>隼人<sup>はやと</sup>が居住していたと伝わっています。彼らは宮殿の警護役や舞人として宮廷に仕えたと言われます。隼人の出身地である南九州地域には横穴が多く分布することから、南山城の横穴も隼人の墓とする説もあります。地名や伝説から、付近に隼人が多く居住していた可能性は考えられますが、今回の調査では、横穴と隼人を結び付ける資料は見つかっていません。



第1図 調査地位置図

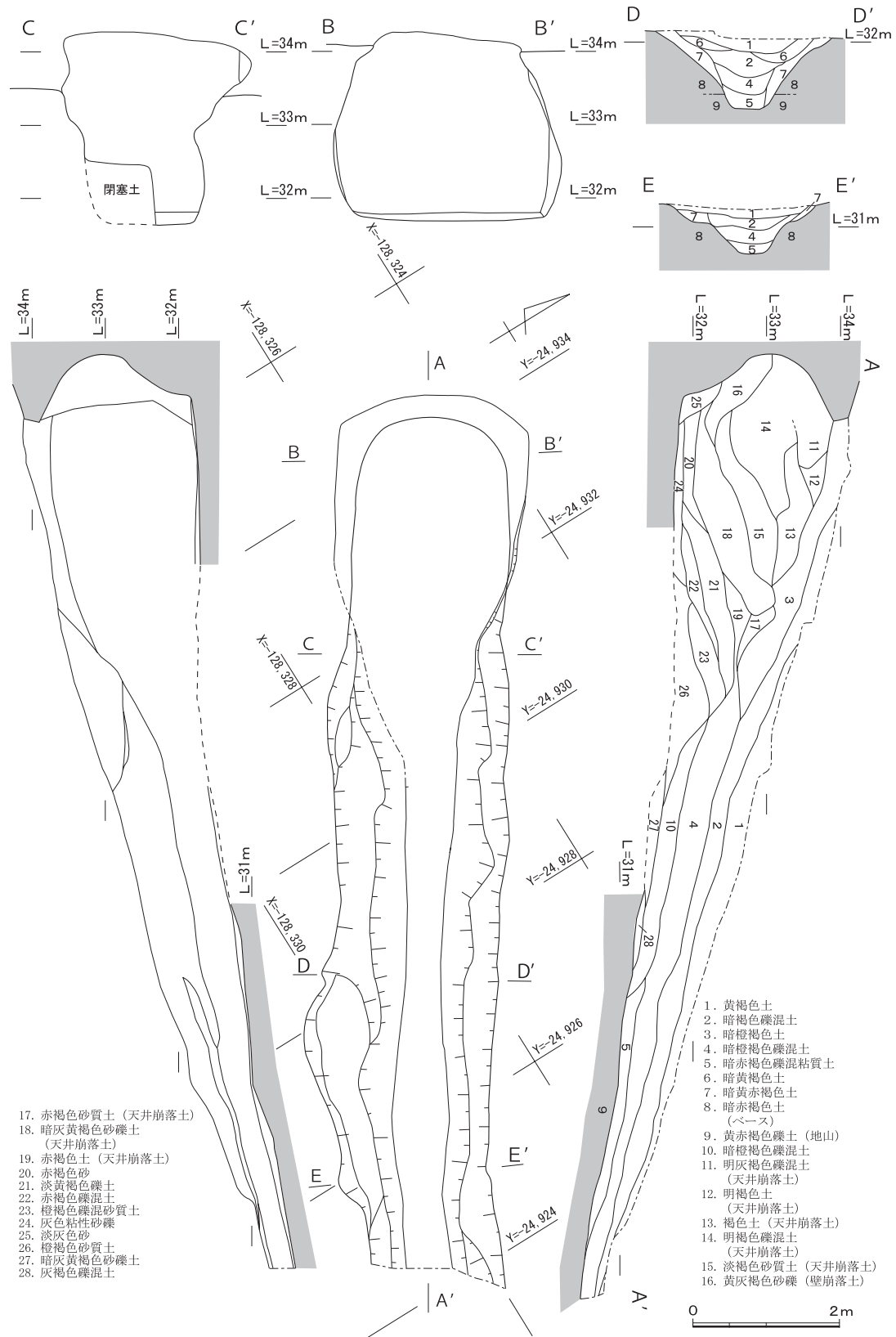


第2図 女谷・荒坂横穴群支群位置図

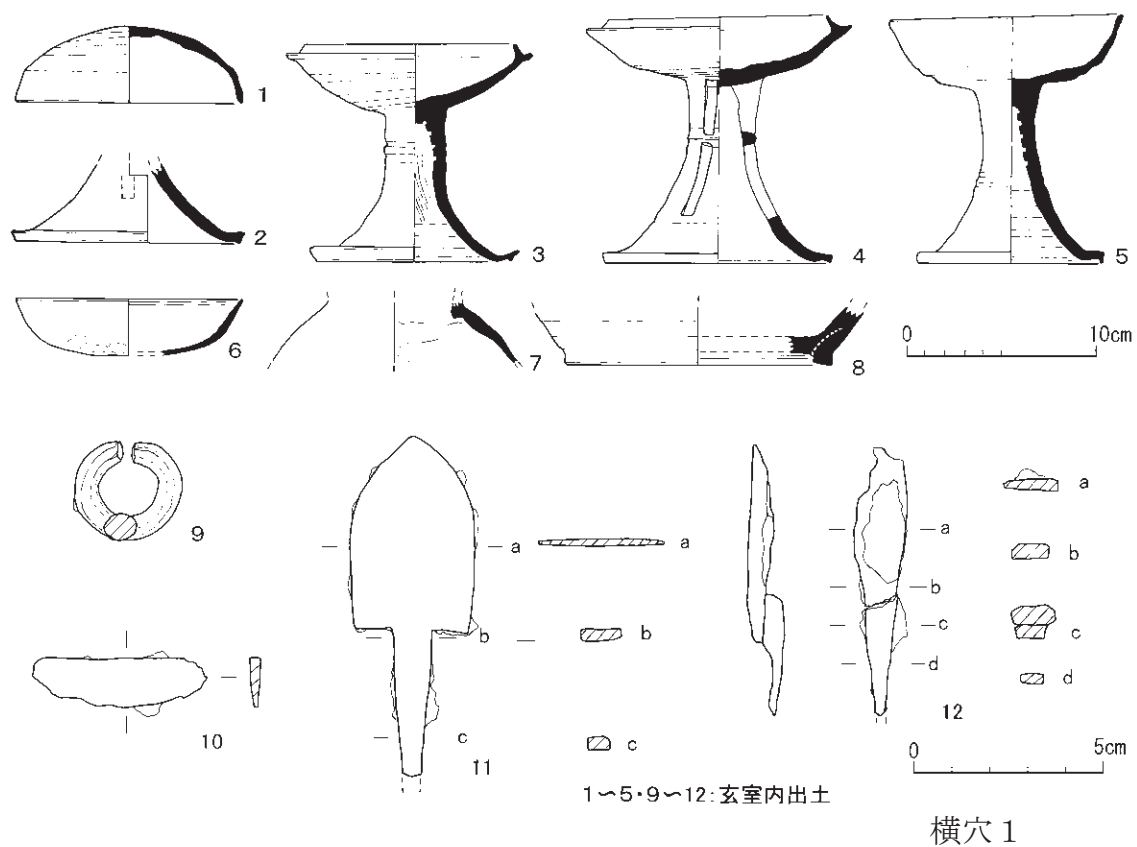


第3図 調査地平面図





第4図 横穴1 実測図



瑞雲双鸞八花鏡



写真1 調査地遠景（北北東から・空中写真）



写真2 横穴調査風景（北東から）



## 京都の後期群集墳

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査員 筒井 崇史

### 1. はじめに

一般に「群集墳」というのは、石を積み上げて造られた横穴式石室を埋葬施設とする小規模な古墳が多数集中して築造されたものを指します。また、山の斜面に掘られた横穴が多数集中して築造されている例もあります。こうした「群集墳」や「横穴墓」は古墳時代後期から飛鳥時代にかけて特徴的にみられるお墓の一形態です。

こうした墓の構造や埋葬に伴う祭祀を調べ、研究することによって、当時の政治や社会のようすを知ることができます。また、1つの石室や墓室の中に複数の人が埋葬されているのが普通ですが、時として人骨が残っており、当時の家族構成などを考えるための材料にもなります。

私の報告では、京都府内で見つかっている「群集墳」や「横穴墓」について、分布や時期、構造的特徴などを紹介し、この時代のようにすを知っていただきたいと思います。なお、以下の地域区分は便宜的なもので、必ずしも当時のようにすを反映するものではありません。

### 2. 京都府内の群集墳

まず、京都府内における群集墳（以下の記述ではすべて横穴墓を含むものとします）の分布と消長（築造期間のこと）をみていきたいと思います（第1～5図）。

①丹後地域 代表的な群集墳として、京丹後市須田古墳群（130基）・崩谷古墳群（4基）・大成古墳群（16基以上）・高山古墳群（17基）・上野古墳群（8基）・大田鼻横穴群（30基）・左坂横穴群（21基）、与謝野町入谷古墳群（31基）などがあります。

「群集墳」は古墳時代後期後半から飛鳥時代にかけて営まれたものが多く、1つの古墳群で築造基数が20基を越えるものは少なく、10基前後あるいはそれ以下のものが大半です。横穴墓が数多くみられることも特徴の一つですが、築造時期は飛鳥時代のものが多く、古墳時代後期のものはほとんど見られません。

②中丹地域 代表的な群集墳としては、舞鶴市大波・奥原古墳群（78基）・干田古墳群（16

基)・三浜丸山古墳群 (7 基以上)、福知山市下山古墳群 (100 基以上)・向野西古墳群 (33 基)・中ノ段古墳群 (20 基)、綾部市久田山 B 支群 (30 基)・細谷古墳群 (9 基)・石隈古墳群 (36 基)・石塚古墳群 (38 基) などがあります。

舞鶴市域の大波・奥原古墳群で約 80 基、福知山市域の下山古墳群で 100 基以上、綾部市の久田山 B 支群で 30 基の古墳からなることが知られており、30 基以上からなる群集墳が多く確認されています。この地域の「群集墳」の大半は、古墳時代後期後半頃から築造が始まり、飛鳥時代の中頃まで続くものが多いようです。

③南丹地域 代表的な群集墳としては、南丹市天神山古墳群 (22 基)・新堂池古墳群 (22 基)・城谷口古墳群 (10 基)・小谷古墳群 (17 基)・坊田古墳群 (8 基)、拝田古墳群 (17 基)・亀岡市小金岐古墳群 (200 基以上)・鹿谷古墳群 (27 基)・北ノ庄古墳群 (14 基)・法貴古墳群 (51 基)・国分古墳群 (60 基以上) などがあります。

亀岡市の小金岐古墳群が 200 基以上の古墳からなるほか、30 基を越える「群集墳」も亀岡盆地を中心にみられます。この地域でも「群集墳」の大半は、古墳時代後期後半頃から築造が始まり、飛鳥時代の中頃まで続くものが多いようです。また、天神山古墳群・新堂池古墳群・小谷古墳群・北ノ庄古墳群では、後期中頃か、それよりも少し古い時期の横穴式石室が見つかっています。このほか石室内部に石柵いしだなや石障せきしょうと呼ぶ構造物が付加された石室がありますが、これらは九州地方や紀伊地域とのつながりを示すと考えられています。

拝田古墳群中の拝田 16 号墳が全長 44 m の前方後円墳で、群集墳中の地域首長墓として注目されます。また、飛鳥時代の例ですが、国分古墳群では八角形墳はっかっけいふんの可能性が高い古墳が見つかっており、特異な墳丘平面形ふんきゅうから、中央政権との関連が考えられています。

④京都市・乙訓地域 代表的な群集墳としては、京都市醍醐古墳群 (20 基)・中臣十三塚古墳群 (5 基以上)・旭山古墳群 (27 基)・御堂ヶ池古墳群 (26 基)・音戸山古墳群 (17 基)・西芳寺古墳群 (43 基) 灰方古墳群 (9 基)・福西古墳群 (28 基)・大枝山古墳群 (25 基) などがあります。

この地域は後期になると嵯峨野地域や乙訓地域を中心に全長 40 ～ 80 m ほどの、横穴式石室を持つ中型前方後円墳ぜんぽうこうえんふんが多く築造されます。これに関連するののか、30 基を超えるような大規模な「群集墳」は認められません。また、群集墳の形成時期も古墳時代後期後半でもやや遅れて始まり、飛鳥時代の中頃まで続きます。

⑤南山城地域 代表的な群集墳としては、宇治市木幡古墳群 (120 基)、城陽市黒土古墳群 (10 基)、木津川市車谷古墳群 (35 基)、八幡市女谷・荒坂横穴群 (100 基以上)・精華町畑ノ前東古墳群 (7 基) などがあります。

宇治市の木幡古墳群や八幡市の荒坂・女谷横穴群は100基を越える古墳や横穴が確認されていますが、そのほかの地域では20基以下の少数の古墳からなる「群集墳」が多いようです。しかし少数の古墳からなる「群集墳」であっても、城陽市の黒土1号墳のように南山城地域最大の横穴式石室を持つ点は、小規模な「群集墳」を評価する上で重要です。また、近年、八幡市の荒坂・女谷横穴群は南山城地域のみならず、近畿地方全体を見ても有数の横穴墓群であることが明らかになりました。「横穴墓」を含む「群集墳」の大半は、古墳時代後期後半頃から築造が始まり、飛鳥時代の中頃まで続くと考えられます。

### 3. 群集墳の特徴 ～ほかの古墳と違うところ～

はじめにも述べたように、「群集墳」は古墳時代の初めからあったのではなく、後期になって出現した新しい古墳のあり方です。ここでは、従来からあった古墳とどのような点が違うのか、みていきたいと思います（第6図）。

①群集墳の特色 このような小規模な古墳は古墳時代前期や中期にもみられますが、後期にみられる「群集墳」などの場合、築造される数が圧倒的に多いのが特色としてあげられます。京都府では30基に満たない「群集墳」が多いですが、奈良県（旧大和国）や大阪府（おもに旧河内国）では数百基という単位で「群集墳」が営まれることもありました。

②首長墳と群集墳の違い 「群集墳」はその圧倒的な基数から、広い地域（クニ）を治めたような首長の墓ではなく、ムラの首長や、ムラの中の有力な農民（有力家長層）が中心であると考えられています。つまり、前方後円墳を築いたような首長層と、「群集墳」の被葬者の間には階層差があったと考えられています。

③群集墳は家族墓 「群集墳」を構成する1つ1つの古墳は、その古墳が築かれるきっかけがあります。世帯主（＝家長）が死んだ時に新しい古墳を築いたのではないかと考えられています。つまり、新しい古墳を築くことができるのは世帯主だけで、世帯主ではない人、例えば配偶者や跡継ぎでない子供などの場合、その世帯主の墓と一緒に葬られたと考えられています。そういった点で、個々の古墳の被葬者は血縁関係で結ばれた人である可能性が高いと考えられます。

④大規模群集墳の被葬者について 先ほども触れたように、奈良県や大阪府では数百基からなる大規模な「群集墳」が知られています。京都府でも福知山市下山古墳群や亀岡市小金岐古墳群、あるいは八幡市荒坂・女谷横穴群のように、100基を越える「群集墳」があります。このような大規模な「群集墳」の場合、遠いムラの人々もそこに埋葬していた可能性もあります。



#### 4. まとめ

京都府内の「群集墳」（「横穴墓」も含む）の分布と消長、その特徴についてみてきました。古墳というのは、もともと首長のために造られたお墓です。つまり特定の個人のために造られたお墓なのですが、「群集墳」の場合、横穴式石室や横穴というお墓の特質もありますが、複数の人々が埋葬されています。この人たちは何らかの血縁的な関係があったと考えられています。

ところで、「群集墳」は、それまで古墳を造ることのできなかつた人々が新たに古墳を造ることを認められた結果、誕生したと考えられています。ここで1つの疑問が生じてきます。

なぜ、新たに古墳を造る人々が生まれてきたのか、という疑問です。

これは大変難しい問題です。例えば当時の王権<sup>おうけん</sup>が地位の低い人々にも古墳を築造することを認めるとともに、王権の影響力をそういった人々に与えようとした可能性も考えられています。

一方で、群集墳の築造が広く浸透した時代であっても、それ以前に前方後円墳を頂点とする大規模な古墳を営んできた地域豪族の<sup>おさ</sup>長達は、その支配領域を組み直されたりして、いくぶん小さくなるものの、引き続き豊富な副葬品や立派な石室・墳丘をもつ古墳を造ります。京都府では、日本一美しい太刀の一つとして重要文化財に指定された<sup>そうしよくつきたち</sup>装飾付太刀を副葬した湯舟坂2号墳や、当調査研究センターのロゴマークのモチーフになった高山12号墳、そして、八角形墳で<sup>ぎんそう</sup>銀装の<sup>た</sup>太刀を副葬した国分80号墳などの事例があります。

また、「群集墳」の築造時期は古墳時代後期から飛鳥時代中頃にかけてですが、この時期は、古墳の築造を止めて仏教を取り入れ、新しい<sup>りつりょう</sup>律令という制度の整備を行おうとしていた時代に当たります。「群集墳」もこうした時代の流れの中で考えていく必要があります。

丹後地域

時期区分		
古墳時代後期	前半	★横穴式石室の出現(近畿地方)
	中頃	★後期群集墳の出現
	後半	崩谷古墳群 大成古墳群 高山古墳群 上野古墳群 入谷古墳群 大田鼻横穴群 左坂横穴群
飛鳥時代	前半	
	中頃	
	後半	
奈良時代	前半	

京都市・乙訓地域

時期区分		
古墳時代後期	前半	★横穴式石室の出現(近畿地方)
	中頃	★後期群集墳の出現
	後半	醍醐古墳群 中臣十三塚古墳群 旭山古墳群 御堂ヶ池古墳群 音戸山古墳群 灰方古墳群 福西古墳群 大枝山古墳群
飛鳥時代	前半	
	中頃	
	後半	
奈良時代	前半	

中丹地域

時期区分		
古墳時代後期	前半	★横穴式石室の出現(近畿地方)
	中頃	★後期群集墳の出現
	後半	*大波・奥原古墳群 *千田古墳群 三浜丸山古墳群 下山古墳群 向野西古墳群 中ノ段古墳群 久田山古墳群B支群 細谷古墳群 *石隈古墳群 *石塚古墳群
飛鳥時代	前半	
	中頃	
	後半	
奈良時代	前半	*は内容が不明瞭なもの

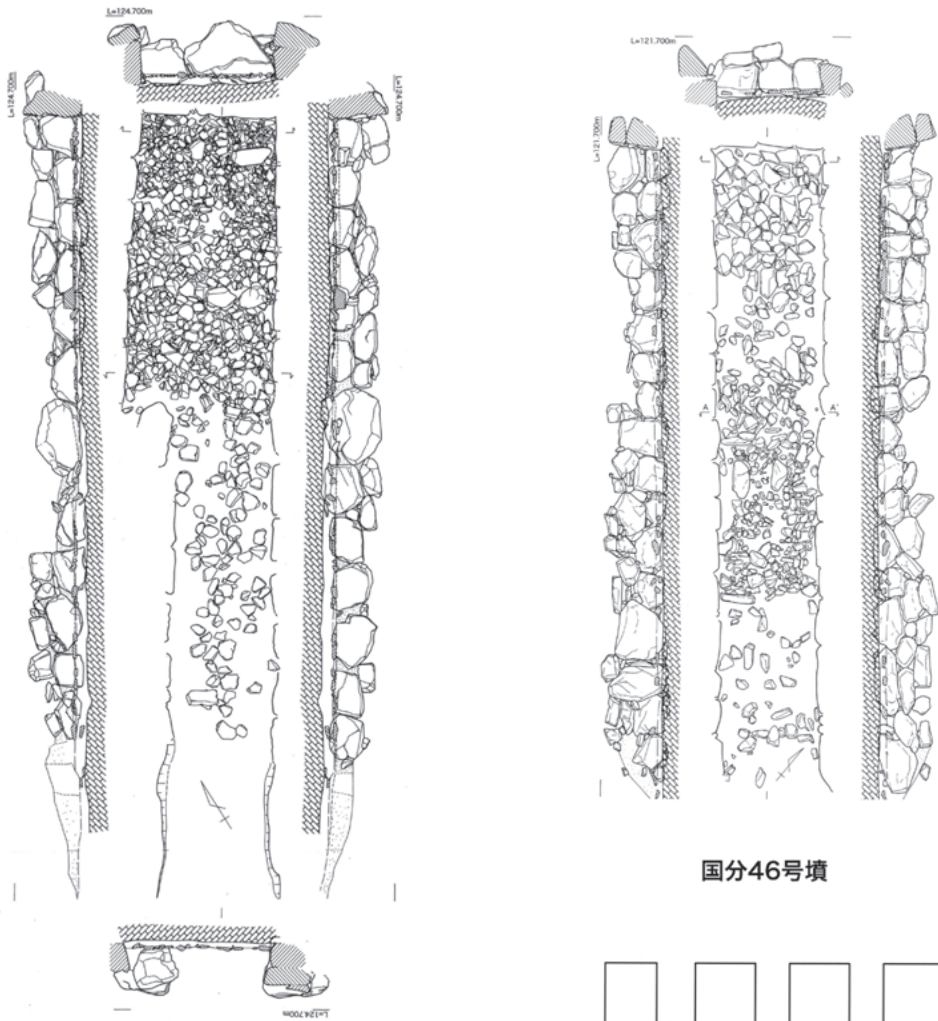
南山城地域

時期区分		
古墳時代後期	前半	★横穴式石室の出現(近畿地方)
	中頃	★後期群集墳の出現
	後半	木幡古墳群 黒土古墳群 車谷古墳群 女谷・荒坂横穴群 畑ノ前東古墳群
飛鳥時代	前半	
	中頃	
	後半	
奈良時代	前半	

南丹地域

時期区分		
古墳時代後期	前半	★横穴式石室の出現(近畿地方)
	中頃	★後期群集墳の出現
	後半	天神山古墳群 新堂池古墳群 城谷口古墳群 小谷古墳群 坊田古墳群 小金岐古墳群 鹿谷古墳群 法貴古墳群 国分古墳群
飛鳥時代	前半	
	中頃	
	後半	
奈良時代	前半	

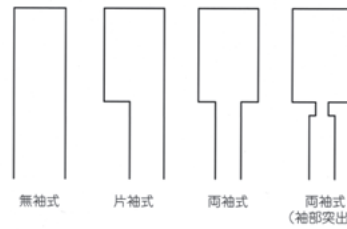
第1図 主要群集墳消長表



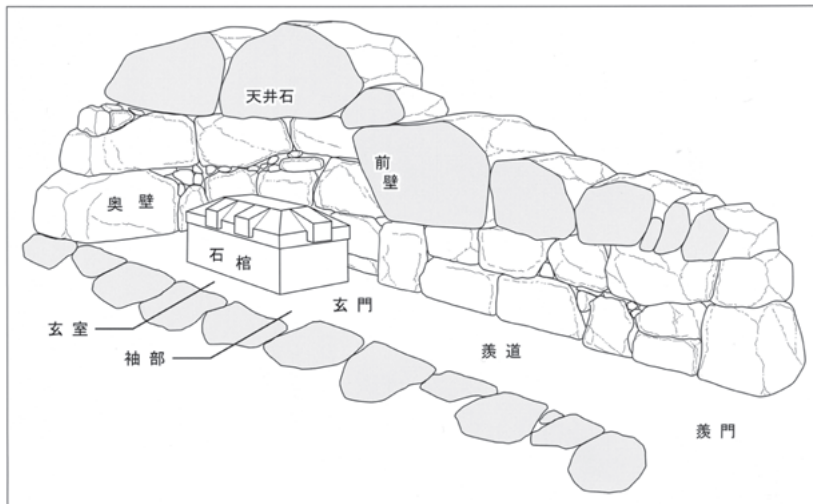
国分29号墳

国分46号墳

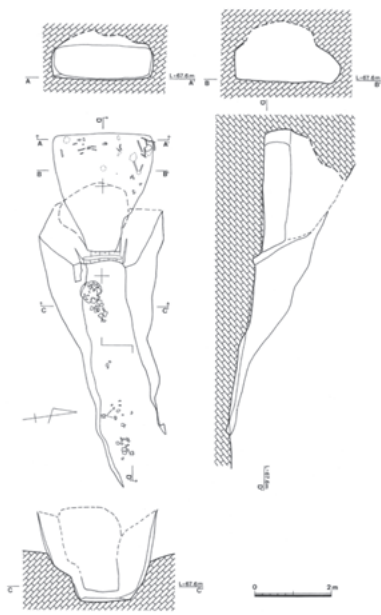
第2図 横穴式石室実測図



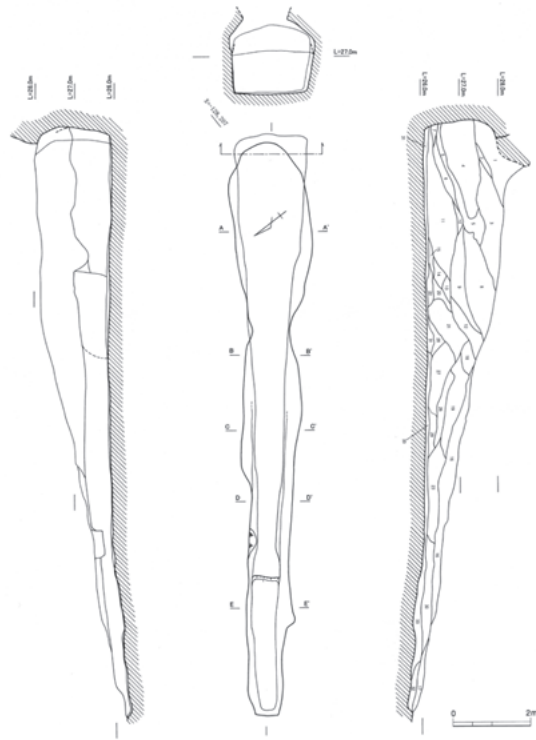
第3図 石室平面形による分類





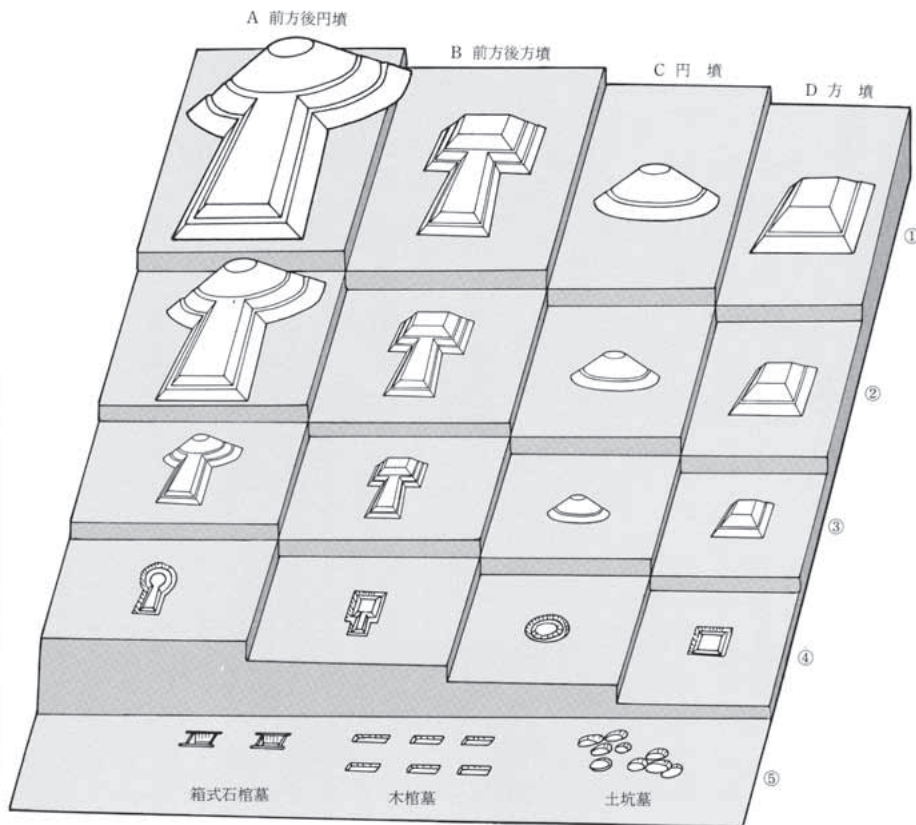


左坂B 4号横穴



荒坂B11号横穴

第5図 横穴墓実測図



第6図 前方後円墳体制



KYOTO  
ARCHAEOLOGY CENTER

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナーなどは、下記のホームページでもご案内しています。

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3

Tel (075) 933-3877(代表) Fax (075) 922-1189